

C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese

カルヴィーノとアーティチョーク 23

ある兵士の冒険

堤 康徳

映画監督のエットレ・スコーラが今年1月に 84歳で亡くなった。今年もゴールデンウィークに有楽町で開催されたイタリア映画祭では、この名匠を追悼するために、代表作『特別な一日』(*Una giornata particolare*, 1977)が特別上映された。彼が残した数々の名作のなかでも、これこそ最高作といつてよいのではないだろうか。流麗なカメラワーク、さりげない細部の仕掛け、きわだつ台詞の妙、ふたりの主演俳優の従来のイメージを覆す演技、そして何よりも、監督の時代を見る冷徹な目によって、ヒトラーの歓迎一色に染まった 1938 年 5 月のローマと、それぞれの疎外感を味わう男女の、対照的な一日が鮮やかに浮かび上がる。映画の舞台は、住民のほとんどが歓迎式典に出かけて閑散とした高層アパート。主人公は、ファシストの夫とのあいだに 6 人の子供がいる主婦アントニエッタ(ソフィア・ローレン)と、同性愛者であったがために国営ラジオ局を解雇されたガブリエーレ(マルチェロ・マストロヤニ)。ヒトラーのローマ来訪の日、アパートにとり残されたこのふたりが初めて出会い、束の間の愛を交わすのである。

『特別な一日』が日本で公開されたのは、1984年だった。上映されたのは、かつて六本木にあったシアター《シネ・ヴィヴァン》。イタリア人の大半がファシズム体制を支持していたという事実を観客につきつけ、その忌まわしい記憶をよみがえらせるこの挑発的な映画に、私は少なからず衝撃を受けた。ファシズムをイタリア史の例外的な暗黒の一頁として、いわばカッコにくくって捉える傾

向がまだ強かった 1970 年代のイタリアに、このような映画が撮られたこと自体が驚きだった。『シネ・ヴィヴァン』誌に掲載されたインタビュー(n. 6, 1984)でスコーラは、制度としては消滅したファシズムが、個人の意思として存続していることをこの映画で描こうとしたと述べている。



【『特別な一日』】

出典: <http://www.taxidivers.it>

さらに、興味深いことに、ストーリーの着想は、イタロ・カルヴィーノのある短篇から得たという。「その小説は、コンパートメントで兵士と未亡人があるとき知り合い、愛を確かめ合うのですが、一言も言葉は交わさないというものです」(小倉万有子訳)。列車の同じコンパートメントに乗り合わせた若い兵士と未亡人の物語。題名は書かれていないが、これは明らかに、「ある兵士の冒険」(*L'Avventura di un soldato*)である。この短篇の初出は、1949年に刊行されたカルヴィーノの処女短篇

集『カラスが最後に来る』だが、1958年の『短篇集』(*I racconti*)においても、若干の修正が加えられて収録されている。『短篇集』には、1958年までに書かれた彼の主要な中篇と短篇が、第1部「むずかしい牧歌」、第2部「むずかしい記憶」、第3部「むずかしい愛」、第4部「むずかしい生活」に分けて再編成されている。たとえば、『カラスが最後に来る』全30篇のうち、12篇が第1部「むずかしい牧歌」に、5篇が第2部「むずかしい記憶」に収められているが、第3部に入れられたのは「ある兵士の冒険」だけである。1970年の短篇集『むずかしい愛』は、1958年の『短篇集』第3部に収められた9篇に、新たに3篇を加えて単行本として刊行されたものである(*Gli amori difficili*, Einaudi, 1970)。

『特別な一日』と、この映画に着想を与えたというカルヴィーノの「ある兵士の冒険」には、一見すると、どちらも密室に近い閉ざされた空間で展開される初対面の男女の物語であるという点を除けば、大きな共通点は見られない。

じつは、4つの独立したエピソードから成る『むずかしい愛』(*L'amore difficile*, 1962)と題されたイタリア映画がある。4つのエピソードのひとつが、ニーノ・マンフレディが監督・主演を務めた、カルヴィーノの短篇を原作とする「ある兵士の冒険」(*Avventura di un soldato*)なのだ。YouTubeにアップされた映像を見るかぎり、おおむね原作に忠実な映画といえるだろう。残りの3つのエピソードは、それぞれ別の作家の作品を原作としている。

カルヴィーノの短篇「ある兵士の冒険」は、復活祭の休暇に列車で帰省中のトマーグラ歩兵の「冒険」を描いている。彼と同じ車室に、喪服姿の若い未亡人が入って来る。彼女は、ほかに空いている座席もあるのに、わざわざ兵士のとなりに腰をおろす。この事実にも勇気を得たのか、彼はほかの乗客の目を盗みながら、彼女への身体的な接触を試みる。たとえば、何かをさがすかのようにズボンのポケットに手を入れて、その手でズボンの生地ごしに彼女の体に触れようとするのだ。やがて同じ車室の乗客たちがみな降りて、ふたり以外に誰もいなくなると、トマーグラはより大胆になり、腕をからませる。女は彼の行動に気づいていないはずはないのだが、ふたりはいっさい言葉を

交わすことがないので、その心情はわからない。トマーグラは、自らのあまりにも大胆な行動に、恐怖心を抱く。これが物語の結末である。



【ニーノ・マンフレディ監督・主演『むずかしい愛』より】

出典: <https://upload.wikimedia.org/wikipedia/it/c/c7/>

Manfredi_Franco.jpg

兵士の行為はほとんど犯罪的である。だがこの作品もまた、カルヴィーノ特有の「距離のパズル」の物語として読めるのではないだろうか。兵士にとって、隣の座席の未亡人との、およそ指の幅2本分の距離は、いわば「命がけの跳躍」にも似た行動によってしか埋まらないのではないか。短篇「カラスが最後に来る」のバルチザンの少年にとって、標的との偽りの距離を埋める唯一の手段が射撃だったように。

『特別な一日』のふたりもまた、しよせん不可能な愛を生きることをよぎなくされている。夜になり、特別な一日が終わると、ガブリエーレは流刑地へと連行され、アントニエッタは夫の待つ寝室へと向かうのだから。性愛の営みによって一瞬だけ埋まったかに見えたふたりの距離は、はてしなく遠い。

今年の一月、プリーモ・レーヴィの短篇集『リリス——アウシュヴィッツが見た幻想』が翻訳・刊行された(竹山博英訳、晃洋書房)。原書(*Primo Levi, Lilit e altri racconti*)は、1981年にエイナウディから出版されている。プリーモ・レーヴィの名は、ア

ウシュヴィッツの地獄を生き延びて、その証言者となった作家として広く知られている。だが、本短篇集には、強制収容所の過酷な体験に根ざす作品だけではなく、それとは直接かかわりをもたない多種多彩な作品が収められている。ここに本書の大きな特色がある。

1975年から81年にかけて書かれた全36の短篇から成る本書は、3つのグループに大別される。第1は、『アウシュヴィッツは終わらない』や『休戦』に共通する主題(アウシュヴィッツでの体験と、強制収容所解放後にイタリアに帰国するまでのオデュッセイア)を扱ったもの。表題作の「リリス」は、アダムの最初の妻で、神の愛人になったという女悪魔リリスにまつわる伝承を踏まえた短篇である。強制収容所で語り手の「私」が出会った、リリスを彷彿とさせる女性捕虜の記憶がたどられる。第2のグループは、SFと定義しうる『天使の蝶』や『形の欠陥』を継承する作品群。ここでは、人間と自然環境が、太古から未来までの時間軸のなかで、いわば人類学的・生物学的な視座からとらえ直されている。第3は、実在の人物になんらかのかかわりをもつもの。これらの作品からは、ユダヤ人への迫害の強まるなかで心のよりどころだった登山への思い、あるいは、戦後、創作活動を続けながら化学技師として塗料会社で働いていたレーヴィの日常などが浮かび上がる。

巻末を飾る「短い夢」と題された短篇は、カルヴィーノの「ある兵士の冒険」に状況設定が似ている。同じ列車に乗り合わせた異国の娘に、かすかな好意を寄せる男の物語なのだ。文学的な野心を秘めながら広告会社で働く男が、仕事でナポリに向かっている。寝る準備をしていた彼のコンパートメントに娘が入って来たとき、彼は「トルストイやモーパッサンの短篇中の鉄道の逸話」を思い出す。さらに、「やはり鉄道に関連するイタロ・カルヴィーノの美しい短篇小説」を想起するのである。題名こそ挙げられていないが、「ある兵士の冒険」とみてまちがいないだろう。イタリア文学を学んだ異国の娘は、サレルノの叔母のもとに向かう途中だ。ふたりはダンテの『神曲』やペトラルカの『カンツォニエーレ』について語り合う。彼がナポリで下車するとき、一緒に降りないかと娘を誘う。しかし彼女は、『カンツォニエーレ』の冒頭を飾るソ

ネットの一句「世の中で好ましいものは、短い夢でしかない」を引用して誘いを断るのだ。レーヴィの古典文学にたいする造詣の深さがここでもうかがえる。だが何よりも、結末はほろ苦いとはいえ、ゆきずりの女性に声をかける主人公をレーヴィが登場させたことに、驚きと親しみを感じずにはいられなかった。

同じコンパートメントに乗り合わせた乗客たちは、誰であれ、運命的なめぐりあわせに期待を寄せ、狭い空間によって強まる連帯感、アヴァンチュールの予感を抱くものなのかもしれない。じつは私にも同じような経験がある。1990年夏、私はサッカーのワールドカップを観戦するためイタリアに滞在し、決勝を含む11試合を現地のスタジアムで見た。6月23日、ナポリのサン・パオロ・スタジアムで、「不屈のライオン」の愛称で知られるカメルーンがコロンビアを相手に歴史的な勝利を飾り、アフリカのチームとして史上初のベスト8進出を果たした。勝負を決めたのは、フィールドプレイヤーとしては最高齢のロジェ・ミラだった。後半途中から出場したミラは、たて続けに2得点をあげた。ミラの2点目は、コロンビアのゴールキーパー、イギータのミスが原因だった。ドリブルするGKとして有名なイギータが、ペナルティーエリアを遠く離れてキープしていたボールをミラがカットして独走し、無人のゴールに蹴りこんだのだ。

きつと夜通し続くであろうカメルーン応援団のフェスタを横目で見ながら、暮れなずむ夕日を浴びるスタジアムを私は足早に去った。翌々日のアイルランド対ルーマニアの試合を見るため、9時の夜行列車でジェノヴァに向かうためだ。同じコンパートメントに、コロンビアの美しい女性ファンが入って来た。私たちは終わったばかりの試合について、イタリア語とスペイン語で語り合った。彼女は敗戦を受け入れることができなかったのだろうか、やがて「ケ・トリステサ(なんて悲しいの)！」と言うと、突然すすり泣きを始めた。私はあつけにとられながらも、ボサノバを歌っているかのように甘美な彼女の泣き声を、子守唄がわりに聞いたのだった。

(上智大学講師)

ローマで双子育児③

浅田 朋子

ローマ中心部、ジャニコロの丘にある「Ospedale Pediatrico Bambino Gesù (幼子イエス小児病院)」は高度専門治療をおこなう、ヨーロッパ最大の研究センターを備えた小児総合病院であり、イタリア全土から難病をかかえた子供たちがここを訪れる。

通常の外来診察もあり、1歳半の双子の娘たちも先日、眼科検診にこの病院を訪れた。そして病院の一角にある「救急外来」の入り口を見た義父が「ああ、思い出すな、大変だったよなあ…」と苦笑いをした。

実は双子が生後5ヶ月のある日、一人がベッドから転落し、この病院の救急外来に連れてきたことがあったのである。

午後8時頃、夫が帰宅して子供を見ていてくれるので夕食の準備にとりかかった。どうでもいいがメニューは魚貝の Pasta であった。

この時期、双子たちは寝返りができるようになり少しずつ体を回転させることができたが、まだまだハイハイや大きな移動はできないので、落ちないようにベッドの長手3分の2まで囲いをした居間のソファベットのうえで一緒に過ごす事が多かった。この日も夫は双子とこのベッドの上で遊んでいた。

しかしこの夜、夫が目を離れた数分の間にベッドの一番端から端まで、今までない程の大移動をしたのである。

台所で料理をしている最中、ふと気がつくとも夫が横にいた。チラチラと私がセットしたタイマーを見ながら「Pasta、茹ですぎないでね」と言う。「ほんまにイタリア人はPastaの茹で加減にうるさいなあ…って、あれ？なんでここにいる？子供は？」と聞くと「大丈夫。二人とも、もう寝かしているし、でも念のためクッションで土手を作った」という。大きなクッションをよける程の力はまだないとは思ったが、何だか嫌な予感がして、すぐに居間にいった。

そして部屋に入った私が見たのは、いままさにベッドの端から落ちようとしている娘であった。よく衝撃の場面を目撃した際「スローモーションになる」というが、これは本当だった。次の瞬間「ゴン！」と頭を打つ音と「ギャ————！！！」という、娘のものすごい声が重なり、私の頭は真っ白になった。落ちた…落ちた…。頭を打ってしまった…。そろそろベッドの上では危ないので子供部屋にマットを敷き詰めて床で過ごさせようと準備していたところであった。もう数日早く準備をはじめていれば…。



【転落後に敷かれたマットの上でご機嫌の二人】

数分後には泣きやんで落ち着き、意識もしっかりあって嘔吐もせず変わった様子はなかったが、とにかく頭を打っているのを病院で見てもらわないといけなない。

すぐに義両親宅に電話した。義父がのんきに「どうした～、またPastaの作り方聞きたいのか？今日は何作ってるんだ」と言ってきた。なかなか読みは鋭いが今回は違う。「子供が落ちてん！ベッドから！！救急に連れて行くからすぐお義母さんと来て！」と私が言うと、飛んで来てくれた。悲壮な顔をして息を切らせ家に入ってきた義母に「病院はどこがいいの！？」と聞くと大声で「バンビーノ・ジェズ病院よ！！あそこしかない！あそこがいちばんよ！！」と叫んだ。

義母に双子の一人と家に残ってもらい、私と夫と娘は義父の運転する車で「バンビーノ・ジェズ病院」に向かった。

この病院は幸いにも我が家から車で10分足らずの所にあるので、あっという間に到着した。急ぎ足で娘を抱え救急外来の門から中に入ったが、

その光景に驚いた。4月とはいえ冷える夜、ざっと見ただけでも救急外来棟の入口外に3、40人ほど待っているのである。「な、なんやこれ。子供祭りか？」と思うくらい子供で溢れている。受付すべく棟の中に入ると、外来受付前の狭い待合室はいっぱい、立って待っている人も合わせると、さらに40人くらい待っている。人をかき分け受付窓口にいる女性医師に「転落して頭をうちました！」と受付の列外から夫と大げさにアピールすると窓口の中に呼ばれた。乳児なので先に通したのだと思うが「あ～、やっぱりイタリアは言うもの勝ち、アピールしたも勝ち。これで早く診察できる。よかった！」と思ったこの時の自分を「まだまだイタリアのことわかってまへんな」と笑ってやりたい気持ちである。

中に入ると「どうしましたか？」と受付の医師がそっけなく尋ねてきた。ベッドから落ちた旨を興奮気味に伝えると「ベッドの高さは？」と聞かれ「50センチくらいです」というと「あー、それくらいの高さか」みたいな顔をするので、「床が、床がタイルですごく固いんです。そこで頭を打ったんです！！」と訴えたが、「柔らかい床なんかあんの？」と冷たく言われた。あんねん、日本には！畳という素晴らしい衝撃吸収性を持つ素材の床が！まあ、そら知らんわな。

ムツとしている私を無視し、ささっと娘を診察すると「緊急性はなさそうだけど、頭を打っているから経過観察する必要がある。もし待っている間に意識がなくなったり嘔吐したら、すぐにここに来て」と受付番号の紙を渡された。外で待つ義父に夫が「受付すぐしてもらえたよ、あといくらなんでも1時間後くらいには診察してもらえらるだろう」と言うと、隣で待つ親子の母親が「何番ですか？」と聞いてきた。紙には「224」と書いてある。224、改めて見ると恐ろしい数字である。「あの、これ224番なんですけど、まさか223人も私の前に受付した人がいるんですかね」と聞くと、「そうですよ、残念ながらね」と言われた。いくらここが素晴らしい病院でも、こんなに処理の遅い国では224番なんか診察できないも同然である。顔色が変わった私たちを見て母親は「でもこれは今日の緊急外来の受付が始まった時点からの受付人数番号だから、もうすでに診察を終えた人もいるので実際こ

の人数が待っているわけではなく、待合室のモニターで自分の番号の横に待ち順番が表示されるから、それを見てこないといけない」と続けて言った。なんともややこしいが、224番よりはましであろうと、モニターを見に行った。たしかに受付番号の横には待ち順番が書いてある。そしてさらに待ち順番の横には、赤・黄・緑・白の4色の中の一つが丸印で表示されている。私たちは39番の緑だ。

「この色の振り分けは何なんだ？」と義父が言うのと私たちの横でモニターを見ていたおじさんが「これは患者の状態を色で示していて、赤は緊急、黄色は至急、緑は、まーちょっと診察待てるくらい、白は、一応診察受けといてくらいのレベルらしい。だから赤色から順に診察されていくんだよ。」と説明してくれた。おじさんの説明からすると、緑色から急に「あんたら、大げさですねん」的な感じで、ガクッと緊急性がなくなっている。そしてこの色分けの判断をしていたのが受付の医師であったのだ。

「なに、じゃあ、うちの孫は転落したのに、たいしたことないってことか！？」と義父が声をあげると、周りもやいやいと「うちも緑よ、もう4時間も待ってるのよ。こんなに咳をしてるのに」と口々に文句を言い出した。どうもいちばん当たりさわりのない「緑」の子供がいちばん多いようだった。たしかに周りの子供たちの状態をよく見ると、その医師の判断は(当たり前だが)間違っただけでなさそうである。しかしチラッと受付窓口のガラス越しに見て自分の子供をレベル分けされたら、親の気持ちとしてはちゃんとした診察を早く受けたいだろう。

受付が後でも重篤な状態であれば先に処置するのはあたりまえだし、多くの患者を適切に処置していくための良いシステムであるとは思いますが、わざわざ患者にもこの「色分け」を公開しなくてもいいのでは、とってしまう。緊急性はないと診断された時点で「よかった」と思うべきところが、この「色分け方式」のせいで親たちは「うちなんか白よ！！ありえない、こんなに辛そうなのに」とまるでオーディションのような変な雰囲気になっている。そして新しい患者がはいってくると「あの子は緑だな」とか「わあ、血が出てる！赤だろう」とか「黄だろ」とか言っている。そして黄色と診断された子が

～会館だより～

イタリア語 無料体験レッスン

7月より開講の夏期イタリア語講座に向けて、体験レッスンを開催します。入門者向け。事前予約制。

● 京都本校：日本イタリア会館

7/ 1(金) 10:30～12:00

7/ 2(土) 10:30～12:00

● 四条烏丸：ウイングス京都

6/28(火) 19:00～20:30

● 梅田：大阪駅前第4ビル

7/ 1(金) 19:00～20:30

イタリア語 無料カウンセリング

学習経験者向けのクラス選びのカウンセリングです。事前予約制。

● 京都本校：日本イタリア会館

7/ 2(土) 14:00～(各人約30分)

スペイン語 無料体験レッスン

● 京都本校：日本イタリア会館

7/ 2(土) 15:00～16:30

来ると「あ…かわいそうに。でもこれでまたうちの子の順番が遅れた…はああ」と自分の中の善と悪の間をいったり来たりして、複雑な気持ちでため息するのである。

待合室にいる人々を観察していると、あっという間に2時間たったが、私たちが来てから7人しか診察室に呼ばれていない。待ちきれず途中で帰る家族も続出である。みな4、5時間は待っているようだった。緊急で病院に来て5時間待ちでありえない話したが、ここイタリアではありえるのである。私たちは長期戦になる覚悟をし、駐車している車の中で待機することにした。

そして結局、私たちが診察に呼ばれたのは午前3時であった…。

「おまたせしちゃったわね～あかちゃん、ごめんねえ～」と優しい女性医師が申し訳なさそうに言った。もう、おまたせとかいうレベルではないがそういわれると「いえいえ、6時間くらい大丈夫ですよ」といってしまうのが日本人の悲しい性である。「転落して頭をうったのよね。…あら、6時間の経過観察、待ち時間で過ぎちゃってる…。あ、でもちょうど検診できてよかったわー。病院にもう一度くる手間が省けたわね、あはははは」といわれ、こちらも仕方なく「そうですね、結果的によかったかも」と笑っておいたが、そんなわけないやろ！と心の中で毒づいてしまった。

とにかく、診察は念入りにしてもらえたのでとても安心でき、この病院が近くにあって本当によかったとつくづく思った。救急外来のシステムと患者の人数にとまどったが、さすがに設備や医師のレベルは高く、子供に何かあればここに連れてくれば安心だとローマの人が思う気持ちがとてもよくわかった。

帰り際の手内から見た病院は、真っ暗なジャニコロの丘で明るく浮かび上がり、とても神聖に見えた。そして、ここで24時間子供たちのために働く医師たちに感謝しなければと思ったのであった。

(元当館語学受講生)

編集・発行 / (公財) 日本イタリア会館

〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町4

TEL: (075) 761-4356 / FAX: (075) 761-4357

E-mail: centro@italiakaikan.jp

URL: <http://italiakaikan.jp/>